

Ⅲ 子どもの発達と遊びの姿 ～環境の構成と幼児への関わりを深める～

本章では、本県の教育課題である「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」の醸成に向けた教育・保育実践を、発達の段階に沿ってまとめています。

「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」などは、「非認知能力」「社会情緒的スキル」と呼ばれる力です。測ることのできる「認知能力」とは異なり見えにくい力ですが、大切な「心の力」です。

こうした力を育てるため、就学前教育の基本である「遊び」の中で適切な援助を行う際の参考にさせていただきたいと考えています。

～自尊感情（豊かな感性と表現等）～

「自尊感情」とは、「自分が好き」「自分を大切に思える気持ち」です。自尊感情が醸成されていることで、自分をきちんと評価し受け入れることができたり、自分の意見を言い、自己決定ができたりする姿につながります。

「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、特に「自立心」や「豊かな感性と表現」などと関連するものであり、それらの内容を踏まえた教育・保育実践をまとめています。



子どもの発達と遊びの姿 ～自尊感情（豊かな感性と表現等）～

事例A-1

保育者の援助の下、素材の動きの変化や面白さを感じ取り、「もう一回もう一回」と繰り返し遊ぼうとする気持ちを受け止めていきます。



0歳

事例A-2

保育所等で、子どもたちは多くの「はじめて」を経験します。その中で子どものつばやきや行動の様子から、感じたことややってみたいと思う気持ちを捉え、今後生まれる学びも想定しながら、丁寧に関わることが大切です。



1歳

2歳

事例A-2

自尊感情（豊かな感性と表現等）

1歳児 「カブトムシにさわったよ」

保護者がカブトムシを持ってきてくれたので、飼育ケースに入れ、子どもたちがいつでも見ることができるような場所に置いた。

カブトムシを見た子どもたちは、「ムシ」と指を差し、飼育ケースをのぞき込んだ。保育者に抱っこしてもらい恐る恐る見たり、戸惑いを見せながらも、保育者が手に持つカブトムシの背中にそっと触れたりする子どももいた。

カブトムシに興味をもった子どもは、登所してくると、保育者と一緒にカブトムシの所へ行き、「ムシさん。」「ご飯食べてるね。」「登ってるね。」など保育者とやりとりをしながら、カブトムシの様子を見、カブトムシの背中に触れるなどして喜んだ。また、カブトムシの手足の動きを真似る姿も見られた。「カブトムシみたいやなあ。」と保育者も一緒にカブトムシになって遊んだ。



○子どもの姿

- ・保育者と一緒にカブトムシを見たり、保育者が世話をしている様子を見たりする中で、カブトムシに興味をもった子どもたちが数人いた。

○保育者の関わりの意図

- ・子どもが見たい時にいつでも見ることができるよう飼育ケースを低い場所に置いた。
- ・保育者がカブトムシの世話をしたり、親しんだりする様子を子どもたちに見せることにより、子どもたちが興味をもち、昆虫などを身近に感じるようになってほしい。
- ・見たことや感じたことを、自分なりに言葉や表情、態度で表現してほしい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・安全面に配慮しながら、初めての虫との出会いの場を大切にしていく。
- ・保育者が子どものつぶやきや表情、態度などから子どもの要求や思いを丁寧に受け止め、共感したり、表現したりすることが、安心して自己を発揮することにつながり、初めての環境にも関わろうとする姿につながる。

事例A-3

発達に応じた素材や場の提供によって、遊びの中で子どもは力を発揮します。自分自身の生活や経験を生かしながら遊ぶことが、自己発揮につながります。



3歳

事例A-4

自分たちの姿をビデオ視聴し、よいところや課題を見付けることは、みんなでよりよくしようとする意欲的な態度を育てます。



4歳

事例A-5

遊びの見通しをもち、具体的にイメージすることで、目的をもった遊びを展開していきます。課題に向けてどのように取り組むか、自ら考える経験が学習の場でも発揮されます。



5歳

事例A-1

自尊感情（豊かな感性と表現等）

〇歳児 「紙ちぎり 楽しいな」

広告のちぎり紙遊びをした。保育者がビリビリビリっと破るのを見て嬉しそうに笑顔を見せていた。保育者の「やってみようか。」の誘いかけにどうしていいかわからない子どもが多かった。たくさんちぎった紙を保育者が「ふわふわー」と言って舞わせると手足を動かして喜んでいった。紙に興味を示すようになり、自分でも引っ張ったり握ったりして触れていた。保育者に「ふわふわー」と紙を降らせてもらうことを喜び、もっとしてほしいという表情を見せていた。



〇子どもの姿

- ・保育者の様子を見て、楽しく面白いものであると感じたようでもっとしてほしいそうにしている。
- ・紙に次第に興味を示すようになり、引っぱったり握ったりして触れている。

〇保育者の関わりの意図

- ・広告紙の感触や舞う動きを見て喜び、楽しいという思いを共有していきたい。
- ・子どもの表情を読み取り、子どもが楽しい気持ちを全身で表し、心を解放して遊べるようにしたい。

〇この時期に大切にしておきたいこと

- ・様々な素材を用いて遊び、動きや感触の面白さを感じながら、その子なりの遊び方で十分に楽しめるような時間を確保することが大切である。
- ・楽しさなどの感情を全身で表現できるように、表情豊かに言葉をかけるとともに、子どもの思いに共感することが、自己を発揮する姿につながる。

事例A-3

自尊感情（豊かな感性と表現等）

3歳児 「小麦粉粘土で遊ぼう」

小麦粉粘土を、子どもの目の付く所に置いておく。

小麦粉粘土を見つけた子どもが、「これ何。」と興味を示し、「ふわふわやなあ。」「匂いする。」と保育者に話したり、笑顔で感じたことを話したりしている。

「団子に丸めてみようか。それとも伸ばしてみようか。」と誘いかけると、「パン屋」「クッキー屋」と発想豊かに楽しんで作っている。

小麦粉粘土で楽しむ姿が見られたので、土曜参観で、「小麦粉粘土で遊ぼう」と題して、親子で小麦粉粘土に魔法の粉（食紅）を加え、小麦粉粘土をつくった。色の変化に興味をもって、ハンバーグやミートボール、お子様ランチに見立てて、親子で楽しむ姿が見られた。

後日、自発的な遊びの場で自由に小麦粉粘土が使えるように、環境を整えた。

『からすのパンやさん』の絵本を読んだことにより、お店遊びが始まった。様々な材料や用具を準備したことで、小麦粉粘土で「アンパンマン作ろう。」「たけのこパンやで。」と興味をもって遊ぶ姿が見られた。

○子どもの姿

- ・入園当初から、粘土、ブロック、ままごとコーナーで好きな遊びを見つけて遊んでいる。
- ・5月半ば、草花でペンダントや花束をつくったり、サーキット遊びをしたりして、保育者と一緒に好きな遊びを楽しんだことで、友達と話す姿が見られるようになる。

○保育者の関わりの意図

- ・小麦粉粘土で遊んだ経験を生かし、ごっこ遊びにつながってほしい。
- ・素材の性質や色の変化を感じてイメージを膨らませ、表現する楽しさを味わってほしい。



○この時期に大切にしておきたいこと

- ・同じ遊びの場にいる友達に目を向けられるようになり、一緒にいることや同じことをして遊ぶことを楽しむ（平行遊び）時期である。
- ・乳幼児期には、楽しみながら手先を使う遊びが展開できるよう、素材や遊びの展開を工夫することが大切である。
- ・自分のしたい遊びを十分に楽しむことができるように、表現しやすい素材を用いることも大切である。

事例A-4

自尊感情（豊かな感性と表現等）

4歳児 「みんなでかっこよくダンスをしよう」

前日に撮ったダンスの練習の動画をみんなで見た。友達の動きを見て、「腕が伸びていて、Aくんかっこいい。」「Bくんもかっこいい。」と認め合っていた。

「みんなの動きがばらばらだった。」と気付く声が上がった。「どうしてだろう。」と問いかけると、「曲をちゃんと聞いていないからだ。」という意見が出た。保育者も「なるほど。ちゃんと曲を聞けばみんな揃うかもしれないね。」と共感した。

自分の姿を見て気付いたことはあるか問いかけると、「手を伸ばすところで、足も一緒にジャンプしてしまった。」「パンチする時、自分の手が伸びていなかった。」と気付いたことを出し合った。「あっ、僕も。」「私も。」と新たな課題を見付けた。

「しっかり伸ばした方が絶対かっこいい。」と子どもから声が出た。「本当だね。その気付きは大事なことだね。先生もそう思う。」と共感した。

「上手に踊れているところやもう少し練習した方がよいところをたくさん見付けることができたね。」と子どもに共感したことから、「もう1回踊る。」「次は手を伸ばすぞ。」と意欲的に取り組む姿が見られた。

○子どもの姿

- ・日頃からダンスや体操などを好む子どもが多く、体を動かすことを楽しんでいる。
- ・2学期になり運動会の練習が始まり、意欲的に取り組む姿がある。

○保育者の関わりの意図

- ・自分のよいところや、もう少し工夫したらよいところに気付けるように、子どもがダンスを踊っている姿を動画で撮り、視聴する機会をもつようにした。
- ・動画を見てみんなで楽しく振り返り、子どもの気付きを取り上げることで、頑張ろうとする気持ちにつなげたい。
- ・自分たちのダンスを更によりよいものにしていくために、自ら課題をもって取り組んでいこうとする意欲を育てたい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・体を動かしてダンスをすることで、友達と一緒に表現する楽しさを味わう。
- ・友達のダンスする姿が刺激となり、自分も繰り返し試してみようとする気持ちにつながる。
- ・動画視聴から自ら課題を見付けることが意欲となる。また、できた喜びを重ねる経験が大切である。

事例A-5

自尊感情（豊かな感性と表現等）

5歳児 「パンケーキのクリームをつくりたい」

毎日の泡遊びから、とろとろのクリーム状の泡ができた。先日から友達とパンケーキづくりをして遊んでいたA児が、パンケーキにのせるホイップクリームにしたいと言い出した。

「先生、つくった泡ね、ほら、クリームみたいになったよ。これ、パンケーキにのせたらいいと思う。」

「ほんと。パンケーキ屋さんのクリームに使いそう。」

「やってみる。」と、A児は、絞り袋に泡を入れてみた。

「わあ、ぶちゅぶちゅ。あかんわ。もっと固い泡をつくらないと。」

数日の雨の後やっと晴れ、泡遊びができる日になった。

「先生、今日はパンケーキにのせられる固さのクリームをつくるわ。固いのをつくらないと、またぶちゅぶちゅになるなあ。」

「どんな固さの泡なら、クリームになるの。」

「ボウルをひっくり返しても落ちないぐらいの固さやねん。」

しばらくすると、「先生できた。ほら。」絞り袋に入れて絞ると、泡がクリームのようになった。

「できた。できた。」

「ほんと、パンケーキの上にのせられたね。おいしそう。」と共感した。

○子どもの姿

・A児は、先日から、台紙やスポンジに自然物などを飾ってパンケーキに見立てて遊んでいた。他児が泡遊びでつくっていたクリーム状の泡を見て、パンケーキに使いたいと言い出した。生活経験の中から出てくる発想を生かし、様々なものに見立てて遊びを展開している。

○保育者の関わりの意図

・A児の思いに寄り添うことで、遊びへの意欲につなげていきたい。
・子どもがもっている自分のイメージを具体化できるように言葉をかけることで、試行錯誤しながら実現できるようにしたい。

○この時期に大切にしておきたいこと

・子どもの気付きを新たな課題につなげ、考えたり工夫したりして、遊びに取り組む。
・失敗してもあきらめず、やってみようとする態度を認めることが大切である。また、どのようにしたいのか、具体的なイメージをもつことで挑戦する意欲が増し、継続して取り組む姿につながる。
・目的に向かって試行錯誤してきた過程を受け止め、幼児が達成感を味わえるように認める。

～規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）～

「規範意識」とは、決まりを守ればよいというものではありません。子ども自身が、集団生活や遊びの中で様々な決まりがあることに気付き、決まりの必要性やその意味を子どもなりに理解した上で、守ろうとする気持ちをもつことが大切です。

「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、特に「道徳性・規範意識の芽生え」と関連するものであり、その内容を踏まえた教育・保育実践をまとめています。



子どもの発達と遊びの姿 ～規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）～

事例B-1

大人との安定した関係を基盤に、「楽しかった」「気持ちよかった」という経験を重ねていくことで、待つということを自然に理解できるようになります。

事例B-2

身近な人の愛情を基盤に、遊びを通して、友達のもの、自分のものが分かり、人との関わりや必要な言葉を覚えていきます。

事例B-3

遊びの約束を言葉で知らせるよりも、具体的に示すことで「交代」「待つ」などの意味が分かり、友達と遊ぶ楽しさにつながっていきます。

Aちゃんもする。
Bちゃんの次にする
から待っててね。



ほくも
したいな。

どうぞ。



Aちゃん、Bちゃんにも
ボールもってきてあげて
くれる。
Bちゃんにどうぞってわ
たしてあげて。



よかったね。
ありがとうだね。

はあい、行っ
てきまあす。



ここまできたら交代
ね。
友達が待っているよ。
行ってらっしゃい。



ありがとうだよ。

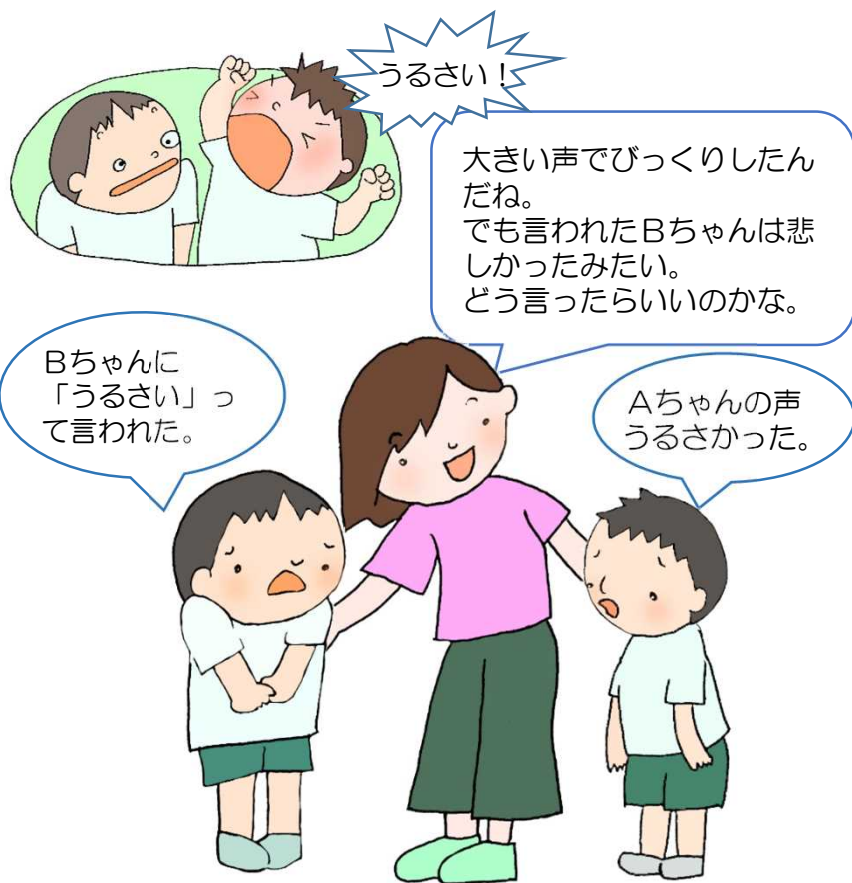
0歳

1歳

2歳

事例B-4

友達との関わりの中で、自分の思いを伝えたり、相手の思いを知ったりします。経験の中で、何がいけなかったのか、どのようにすればよいかを、順序立てて一緒に考えることで、自分で判断できるようになります。



3歳

事例B-5

結果だけを言うのではなく、何が原因だったかを友達と一緒に考えることで、チームが力を合わせて、最後までがんばろうという気持ちが育っていきます。



4歳

5歳

子どもの発達と遊びの姿 ～自尊心感情（豊かな感性と表現等）～

事例A-1

保育者の援助の下、素材の動きの変化や面白さを感じ取り、「もう一回もう一回」と繰り返し遊ぼうとする気持ちを受け止めていきます。



0歳

事例A-2

保育所等で、子どもたちは多くの「はじめて」を経験します。その中で子どものつばやきや行動の様子から、感じたことややってみたいと思う気持ちを捉え、今後生まれる学びも想定しながら、丁寧に関わることが大切です。



1歳

2歳

事例B-1

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

0歳児 「『えんやらももの木』やりたいな」

保育室で「えんやらももの木」のふれあい遊びをしていた。保育者の歌が聞こえると、別の場所で遊んでいた子どもたちも集まってきた。

A児は、友達が大きいバスタオルの上でハンモックのようにして「えんやらももの木」の歌に合わせて揺らしてもらっているのを見ていた。

「やりたいなあ。」という様子で、じわじわと前の方に出てきたので、「Aちゃんもしたいの。」「次しようね。待っててね。」と声をかけた。A児はうなずいてその場で待っていた。

A児の順番になり、「Aちゃんの番がきたよ。上手に待てたね。」と声をかけると、自分からバスタオルの上に寝て「えんやらももの木」の遊びを喜んでいた。



○子どもの姿

- ・子どもたちは、ふれあい遊びが好きで、保育者が歌を歌い始めるとそばに寄ってきて、自分もしてほしいと要求する。
- ・自分もしてほしい気持ちがあっても、自分から表出してくい子どももいる。

○保育者の関わりの意図

- ・「自分もしてほしい」「やりたい」という思いを表情や態度で表し、「できて嬉しい」「楽しかった」という経験を積み重ねられるようにしたい。
- ・したい気持ちを十分に受け止め、期待して待つことができるように声をかけた。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・子どもが「自分もしたい」という気持ちを表情や態度で表したタイミングを捉え、保育者が笑顔や言葉でその思いを受け止め、共感することが安心感につながる。
- ・「したいことができた」「楽しかった」という経験を積み重ねる中で、0歳児なりに「またしたい」「次かな」と期待しながら待つ姿を大切にする。待っていると順番がくるということを経験を通して理解していくことが大切である。

事例B-2

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

0歳児 「おもちゃをどうぞ」

A児を抱いてあやしているところへ、ボールを持ったB児が、保育者と一緒に遊ぼうと寄ってきた。

保育者とB児がボールをついたり、転がしたりして遊んでいるのを、A児がじっと見ていた。

B児と遊びながら、「ボール、ぽーいやなあ。」とA児にも声をかけた。それまで泣いていたA児だったが、声かけに足をつんつん動かして喜ぶ姿も見られた。

B児に「Aちゃんのボールも持ってきてあげて。」と声をかけた。

B児がボールを持ってきたので、「Aちゃんに『どうぞ』って渡してあげて。」と言うと、B児はボールをA児に渡した。A児はボールを受け取り、保育者の膝から降りてボールで遊び始めた。



○子どもの姿

・A児は、保育者に抱っこしてもらいたい、そばにいてほしいという、甘えの要求が強いところがある。少しの間、保育者に抱かれて甘えたい気持ちが満たされると遊びに向かうことができる。

・B児は、友達に玩具を渡したり、名前を呼ぼうとしたりするなど友達に積極的に関わろうとする姿が見られるようになってきた。

○保育者の関わりの意図

・A児が保育者と友達の遊ぶ様子をじっと見ていたので、同じ玩具を渡してもらうことで、遊び始めるきっかけになればと考えた。

・B児には、更に友達との関わりを増やす機会にと声をかけた。

○この時期に大切にしておきたいこと

・一人一人の子どもの甘えや要求に応えたり、気持ちを受け止めたりしながら、安定した生活を送れるようにする。

・保育者に見守られながら、好きなもので遊んだり、保育者や友達と一緒に遊んだりすることが楽しいと感じられるような環境づくりや声かけをするなど、保育者の援助が大切になってくる。

事例B-3

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

2歳児 「バンバンカー遊び」

園庭で、車や三輪車に乗ることを楽しんでいる。白線で道を描くとその上を走り、遊ぶ姿が見られた。車に乗りたくて、順番を待っている子どもが「替わって。」と言うが、A児の耳には届かない。

保育者も一緒に声をかけ、聞こえてはいるものの、なかなか交代することができない。

そこで、道の上に一本のラインを引き、「ここまで来たら交代ね。」と伝えた。すると、A児はそのまま車を走らせ、交代することができた。

ラインの横に円を描き、交代してほしいときは円の中で順番を待つことを知らせた。

「もうすぐ順番がくる」「次は自分の番」という見通しをもつことで、順番を待つことができ、繰り返し楽しむ姿が見られた。



○子どもの姿

- ・A児は、他の遊びの中でも、なかなか交代できないという姿があった。
- ・この時期、順番が分かり待つことができる子どももいるが、「順番」「かわりばんこ」の理解については、発達や生活経験の差により個人差が大きい。

○保育者の関わりの意図

- ・A児は、声かけだけでは聞き入れにくかったため、ラインを引くことで、交代場所を視覚的に理解できるようにした。待つ場所も円を描いて知らせ、「次は、～ちゃんの番。」「その次はAちゃんの番だよ、もうすぐだね。」と言いながら一緒に待ち、順番を待てばまた乗れることを伝えた。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・友達の存在に気付き、友達と一緒に遊ぶことを楽しむ時期であることから、必要に応じて順番や約束ごとなどを守る経験を積み重ねることが大切である。
- ・一方的にルールとして押しつけるのではなく、楽しむことと合わせて主体的に身に付けることが、その後の思いやりなどにもつながる。

事例B-4

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

3歳児 「友達とのやりとりの中で」

保育室でブロック遊びをしながら、A児がB児に話しかけた。A児は、「うるさい。」とB児に言われてしまう。

A児が保育者に「Bちゃんに『うるさい』って言われた。」と訴えた。

保育者は、「少しAちゃんの声が大きかったのかな。でも、突然『うるさい』って言われて嫌な気持ちになったんだね。」と、A児の気持ちを受け止めた。

B児には、「Bちゃん、Aちゃんの声うるさかったかな。」と尋ねると、「うん、うるさかった。」と答えが返ってきた。

保育者はB児の気持ちを受け止めながら、「そうなんだ。大きな声でびっくりしたんだね。でもね、Aちゃんは『うるさい』って言われて悲しかったみたい。」とA児の思いを伝えた。

二人に「どう言ったらいいかな。」と尋ねると、B児は「Aちゃん、声大きかったよ。」と自然に言葉が出てきた。A児は「声大きくしてごめんね。」とすぐに返した。

数日後、同じようなことがあったが、B児は「声、大きいよ。」と言うことができた。

○子どもの姿

- ・日頃、二人は仲が良く、いつも一緒に遊んだり、行動したりしている。
- ・この時期は、仲良しの友達ができ始める。友達との関わりが多くなり、言葉も発達してくるが、けんかなども見られる時期となる。



○保育者の関わりの意図

- ・二人は日頃の関わりが多く、このような場面がこれからもあると考えられるので、相手の気持ちに気付くことや、相手に伝える話し方などを身に付ける機会にしていきたいと考えた。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・友達との関わりの中で、自分の思いを伝えたり、相手の思いに気付いたりできるような保育者の関わりが大切である。
- ・保育者がしっかりと子どもの気持ちを受け止め共感し、何がいけなかったのか、どうすればよいのかを順序立てて一緒に考えていくことで、自分で判断できるようになっていく。



事例B-5

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

5歳児 「もう一回しよう」

継続して学級で取り組んでいるリレー遊び。この日は欠席者があり、一人足りない。

「僕が2回走る。」「私も走りたい。」「この前のリレーで負けたから今日は絶対勝ちたい。」と子どもたち。

「どうやったら勝てるかなあ。」と投げかけた。

「バトンを落とさないようにしよう。」

「Aくん走るの速いから、Aくんが2回走ったらいい。」という意見が出た。

「Aくん走ってくれる。」と友達が言うと、A児は、「走る。」と嬉しそうな表情で答えた。

A児は2回走ったが、チームは負けてしまった。

「また負けたわ、ぼくが遅かったから。」とA児はしょんぼりとした表情をしていた。他の子どもたちの思いはどうだろうか、様子をうかがった。

そこで、「ちょっとの差だったよ。おしかったね。」と伝えると、「僕こけたから。」「僕もバトン落としてしまった。」と、自分の姿を振り返っていた。

B児が「もう一回しよう。」と提案すると、周りから「悔しいからもう一回しよう。」「今度はもっと速く走るわ。」「A君もう一回走って。」と声上がり、A児は「次がんばるよ。」とリレー遊びが再開した。

○子どもの姿

- ・ A児は走るのが速く、走ることに自信をもっており、積極的にリレー遊びに参加している。
- ・ 走る順番を決めるとき、A児のチームが一人不足、誰かが2回走らなければならなかったが、走りたい子どもが何人かいて、誰が走るかがなかなか決まらない様子だった。

○保育者の関わりの意図

- ・ 勝つためにはどうすればよいかを自分たちで考えてほしいと思い、ヒントになるような声かけだけをして、子どもたちに任せて見守ることにした。
- ・ リレーが終わった後、自分たちの失敗を口々に言ったので、全員が一生懸命頑張ったことを認め、次の活動の意欲に繋がるような声をかけた。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・ 自分の力を精一杯出し、最後まであきらめない気持ちを大切にしたい。
- ・ 自分の思いを話し、友達の思いも聞きながら、力を合わせて活動をする楽しさや、やり遂げた時の達成感を味わってほしい。
- ・ 幼児期の終わりまでに育ててほしい姿の、自立心や健康な心と体、協同性などの姿にもつながっていく。

～学習意欲（思考力の芽生え等）～

「学習意欲」とは、学ぼうとする姿勢です。「やってみたい」「もっとがんばろう」など、遊びの中でも見られる姿です。

「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」（2016年7月、ベネッセ）において、「遊びなどの中で、何かができて達成感を味わう」「絵本などを読んで喜んだり、悲しんだりする」を始めとして、小学校入学前に「感情を伴う経験」が多くあった子どもは、これらの経験が少ない子どもに比べて、小学1年生の時に学習意欲、学習の主体性、自己肯定感をもっている割合が高いことが分かりました。

遊びの中で、有意義な経験に導いていくのが保育者の援助です。

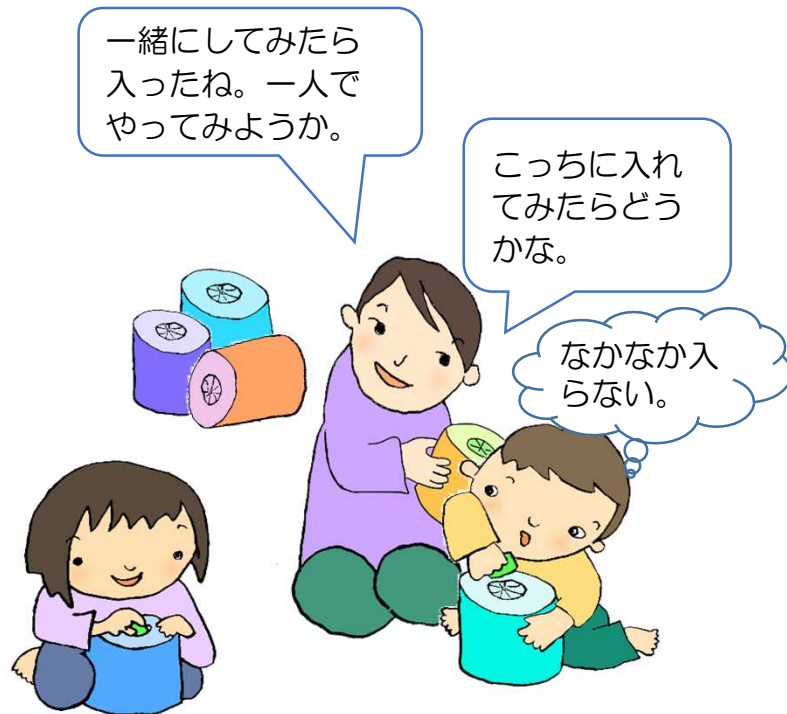
「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、特に「思考力の芽生え」と関連するものであり、その内容を踏まえた教育・保育実践を示しています。



子どもの発達と遊びの姿 ～学習意欲（思考力の芽生え等）～

事例C-1

友達のしていることに興味をもち、保育者の優しい言葉かけや援助で、自信をもち、繰り返し試してみようとする意欲が生まれます。達成感がもてるように、与えるものや順番、声かけなどを工夫することが大切です。



事例C-2

友達の様子に刺激を受けながら、自分の活動を少しずつ広げることで、子どもたちの遊びは広がります。興味や発達段階に合わせて、無理なく自己を発揮できる場面をつくりましょう。



0歳

1歳

2歳

事例C-3

「〇〇遊び」と名前の付くような活動でなくても、子どもにとっては大切な経験であり、重要な遊びです。存分に環境に関わる時間を保障することが大切です。

楽しそうだね。
いろんな音が
するね。

見て見て。
ころころ転が
るよ。

お財布作りた
いのにお金が
こぼれちゃう。

二つ折りだけではこ
ぼれちゃうんだね。
紙をくっつけばいい
かもね。どうすれ
ばくっつくかな。

できた。
セロハンテー
プで付けたよ。
これでお金が
入る。

わあ。大きな音が出
る。いっぱい転
がっていくよ。



事例C-4

遊びへの目的をもち、考えたり試したりしながら最後までやろうとする気持ちが継続するように、子ども一人一人の発達や願いに応じて援助することが大切です。

事例C-5

これまでの遊びの積み重ねの上で、更に遊びの中で試行錯誤するようになります。これまでの経験をうまく利用しながら新しい方法を考える手助けをしましょう。

水は流れたかな。

うまく流れない。

そうや、下に台
を置いて高くし
てみようよ。



なるほど、高さか。
いいことを考えたね。
先生もどうなるか、見
てみたい。

次はコースを曲げて
みよう！

3歳

4歳

5歳

事例C-1

学習意欲（思考力の芽生え等）

0歳児 「ポットン落としたい」

ペットボトルのふた落としの玩具で遊んでいる。
A児も一緒にするが、指先にうまく力が入らず、ふたが缶に入らない。

「難しいね。こうやってぎゅって押してごらん。」と、手を添えて一緒にやって見せる。保育者に手伝ってもらって、ふたが入り「できた。」という嬉しそうな表情で、保育者を見る。

「やったあ、できたね。」と一緒に喜ぶと、A児は今度は、自分だけでしようとするが、なかなか入らない。

A児は、他の友達の様子を見て、いろいろな缶にふたを入れようとする。

最初使っていた缶を持ってきて、「もう一回、これでやってみようか。」とA児を誘い、保育者が手伝いながらやっていたが、やっと自分だけでふたを缶に入れることができた。

それがきっかけで、繰り返し遊びを楽しむことができた。



○子どもの姿

・友達が、缶の中にペットボトルのふたを落として遊んでいるのを見て同じように遊び始めた。

○保育者の関わりの意図

・できたことを認め、一緒に喜ぶことで、もっとやってみようという気持ちをもてるようにしたい。
・なかなかふたが入らないが、保育者と一緒することで方法が分かり、自信をもって、繰り返し遊べるようにしたい。

○この時期に大切にしておきたいこと

・保育者との受容的・応答的な関わりのもとで、思いや欲求を伝えようとするようになる。
・指先を使って、つまんだり、つかんだりする遊びをすす中で、手指の発達が見られる。できるようになることで、指先を使う他の玩具も挑戦し、遊びを楽しむようになっていく。
・できた喜びを保育者と共感し合うことが次への意欲につながる。

事例C-2

学習意欲（思考力の芽生え等）

0歳児 「登れるかな降りられるかな」

子どもたちが保育室にある乳児用滑り台で遊んでいる。A児は、友達が一人で滑り台の上まで登り、おしりで滑っていく様子を見ていた。

しばらくして、滑り台の階段を下からゆっくり登っていくA児。あともう一段というところで躊躇し、進んでは戻ることを繰り返している。

「Aちゃん、ここまでおいで。」と、滑り台のところから呼ぶと嬉しそうに笑うが、やはり頂上までは登れずにいる。

A児の身体の動きに合わせ、保育者が「よいしょ。よいしょ。」「上手だよ。」と声をかけていくと、笑顔を見せ、ついに頂上まで登ることができた。

保育者が近くに寄り添いながら「登れたね、うれしいね。」と話しかけたが、今度は降りる不安があるのか表情が硬い。A児の体を支えながら「おしりズリズリしようか。」と降り方を知らせると、下まで降りることができた。「やってみたい」が「できた」に変わり、A児は満足そうな表情だった。

コツをつかんだA児は、その後、保育者に見守られながら、繰り返し登り降りを楽しんでいた。

○子どもの姿

- ・A児は、友達の様子を見て「自分もやってみたい」という思いを抱いていた。
- ・自分の手足、体をどう動かせば上手くできるのか、分からない状態であった。



○保育者の関わりの意図

- ・少し怖いと思いながらも、ほめられたり促してもらったりしながら、A児の「やりたい気持ち」が維持できるようにしたい。
- ・保育者に見守られながら挑戦して、登り降りの感覚をつかめるようにしたい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・0歳児の運動機能の発達は十分ではなく、これから様々な体験を通して成長していく。
- ・子どもは、「やってみたい」という思いで、自分の手足、体をどう動かせばよいのか、試したり考えたりする。
- ・保育者が子どもの気持ちを受け止め、「できた」という達成感を味わえるような援助を積み重ねることで、更なるステップへの意欲につながる。

事例C-4

学習意欲（思考力の芽生え等）

4歳児 「自分でできた」

2、3日前から数名の子どもがカップに花はじきを入れて机の上に並べ、かき氷やさんごっこが始まった。

周りの友達（お客さん役）が紙やマジック、はさみ等を使って財布をつくっているのを見て、A児もつくりたいという気持ちを持ち、つくり始めるが、どのようにすればよいのかが分からず保育者に聞きに来た。

初めは「友達につくり方を聞いてみようか。」と声をかけるが、自分でつくりたい様子であった。

「中にお金を入れるなら袋にしなければいけないね。紙を半分に折って見たらどうかな。」とA児に伝える。

半分に折った紙の間に手作りのお金を入れるがこぼれてしまい、何度か試している。

保育者が「紙をくっつければ袋になってこぼれないかもね。どうしたらくっつくかな。」と声をかけてみた。少し考えて、セロハンテープでとめることを思いつき早速試す。

うまく袋になると「できた。これでお金入る。」
「絵をかいたら〇〇のって分かるんちゃう。」と嬉しそうに絵をかき始めた。

○子どもの姿

- ・友達が紙に絵をかいてハサミで切って遊んでいた姿を見て、A児も製作遊びに興味をもち始めていたところであった。しかし、自分のつくりたい物をどのように形にすればよいのかが分からず戸惑う姿があった。
- ・友達に聞いて教えてもらうことも恥ずかしそうにしていた。

○保育者の関わりの意図

- ・友達に聞いたり教えてもらったりして、子ども同士の間で何か発想が生まれればよいと思い、友達と関わるように声をかけた。
- ・子どもの様子を見ながら少しヒントになる言葉を出し、試したり工夫したりすることで、方法を自分で見つけ達成感を味わったり、つくる楽しさを知ったりできるようにした。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・遊びの中で友達のしていることを真似たり、一緒に会話を楽しんだりしながら友達との関わりをもつことができるようにする。
- ・「〇〇したい」という意欲を大切にしながら自分で試したり工夫したりする経験を積み重ね、充実感や達成感を味わい自信につなげるようにする。
- ・保育者は一人一人の思いやイメージを十分受け止め、周りの友達と共有して楽しめるよう仲立ちをする。

事例C-5

学習意欲（思考力の芽生え等）

5歳児 「樋（とい）つなぎ」

5月下旬、砂場で水を溜めて水たまりにしたり、魚や星の型抜きを浮かべて海をつくったりして遊ぶ様子があった。

6月上旬、樋（とい）や台となるものを準備しておいた。A児は、やかんに水を入れて砂場まで運んでいたが、水道の蛇口から砂場まで、樋を繋げて水を流すことと思いついた。しかし、樋が下を向いたり、地面と平行に設置されていたりするため、水が思うように流れない。どうすれば水が流れるか子どもに尋ねると、「樋が下を向いてるからだめだ。」「樋の下に何か置けばいい。」「斜めに樋を傾けてみる。」と子どもなりに考えたことを試す。

A児とB児は、遊びが続くにつれて、樋と樋を洗濯バサミで固定し、長くしたり、ビールケースで高低差をつけたりして水流しを楽しむようになった。

「なるほど、高さか。いいことを考えたね。」と子どもたちの考えを認めた。

また、B児が樋をU字型につなげて水を流そうとすると、周りにいた子どもが興味を示し、「こうしたら。」と意見を出し合い、一緒に実現しようと試行錯誤する様子が見られた。「みんなで考えたの。すごいね。工夫してつくったんだね。」と声をかけると、みんな満足そうな表情を見せた。

○子どもの姿

- ・ A児は、今まであまり遊びが継続しない様子だった。
- ・ 砂場で遊ぶようになると、自ら考えたことを試す姿が増え、自分の思いを実現できたことや、保育者や周りの友達に認めってもらったことが喜びとなり、継続して遊びを楽しむ様子が見られた。

○保育者の関わりの意図

- ・ 思うように水が流れないのはなぜかを、試行錯誤しながら考えられるようにしたい。
- ・ A児が気付いたことを周りの子どもに知らせたことが、友達と一緒に遊びを進めていくきっかけになった。
- ・ 考えたことや発見したことを保育者が認め、他児に発信することで、遊びが共有され、深まってほしい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・ 遊びの中の成功体験を積み重ねることで、子どもの自信につながり、新たな遊びのアイデアやひらめきが生まれ、更なる意欲につながるのではないか。
- ・ 個々の遊びを充実すると共に、友達の遊びへの興味や関心を広げることで、協同した遊びへとつながっていく。

幼児期の遊びの意味 ～5歳児の遊びから～

ここでは、子どもが夢中になる遊びの中に見える学びを、事例を通して見てみましょう。

幼児期の遊びは、身近な環境に関わり、子どもの興味・関心を生かしながら発展していきます。楽しみながら学びを追究する子どもの姿は、何日も続いたり、時には一定期間をおいた後、盛り上がることもあります。

6月頃、5歳児が砂場で樋（とい）を使って水を流す遊びは、多くの園・所でよく見られる光景です。高低差を付けて流したり転がしたりする遊びは、3歳児の頃、どんぐりを転がして遊んだ経験などから発展していきます。

この園では、6月に砂場で経験した遊びが、秋にはビー玉転がし装置に発展しました。つなぎ方や壁の高さ、支柱の立て方などを少しずつ試しながら工夫しています。



すべてを与えるのではなく、「こんなものがある
ここに使えるんだけど…」などの意見を引き
出しながら、何日も取り組みました。

子どもの努力と工夫の詰まったビー玉転がし装置
は、園内作品展で展示されました。



作品展後、5歳児の作品に憧れ、影響を受けた
4歳児が、保育室でどんぐり転がしをつくり始め
ました。



このように、就学前教育施設での遊びは、互
いに影響し合い、学びが深まっています。